

「須弥山」(しゅみせん)登山 下見報告

心身共に毫碌の“佳境”に入りつつある現在、誠に情けないことに昔取った杵柄の岩沢雪氷はおろか、裏山のハイキングさえ手に余る体たらくと相成った。足腰の筋肉がその役目を全く放棄したことに加えて眼の方も怠けてしまって運動神経との連動を放棄した結果、下山の山坂下り道では地上に張り出している根に足を取られて転倒&顔面制動、悪くすればハイそれまでヨの複雑骨折、助かっても顔面お岩さんの傷だらけという始末。マ、これはこれで人生流離の河の流れのうたかたの常態であろうから特に思い煩う事でもないが、そうかと言って“安全第一”で外にも出掛けず家に閉じ籠ってばかりいるのも能が無い。

という次第で同じ“山”でも〇〇山△△寺なる山号の付いた“山”に方向転換を始めて10年ほど経った。この間、四国遍路八十八か所、四国別格二十霊場、日本百観音霊場をそれぞれ二巡し都合通算400寺を廻り、総巡礼距離は8,000kmになった。

この内、往古の巡礼道が現在は殆どが国道や県道の幹線道路になっている坂東観音霊場33札所は歩いて巡っても車の騒音と排ガスに悩まされるだけなのでお寺の最寄りの駅までは電車などを使ったが他は殆どを巡礼古道を徒歩で巡った。霊場のお寺には、鄙の山中の山寺も沢山あったので、半分は山登りやハイキングの気分も味わった。

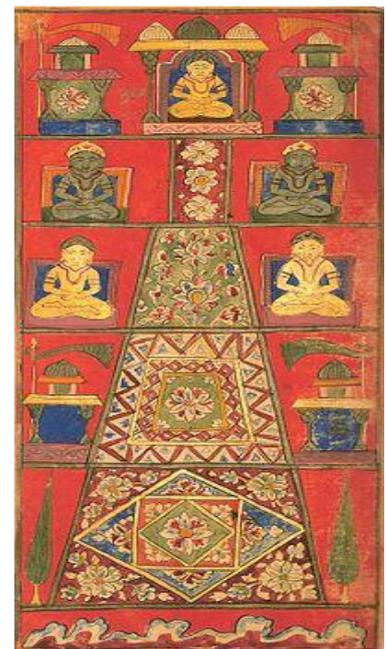
と言え、一見、高尚な宗教上の“修行”に聞こえるかも知れないが、小生の場合はお寺巡りは信仰心や修行心などという高尚な理由からではなく、「ひとすなる遍路といふものを、してみむとてするなり・・・」と言う程度の謂わば全くの物見遊山プラス門前裏町の夜遍路に極く若干の懺悔の心を織り混ぜた程度のシロモノである。小生は前世の因縁も悪く、今生でも悪行の限りを尽くしたので供養も功德も積めず、その結果、お寺廻りをしても当然のことながら瑞兆も験も御利益も無かった。

マ、左様な御利益を期待して歩いた訳ではないので、参拝後の門前町の紅灯で御仏さまに般若湯を差し上げてそのお零れを頂戴するという酒池(肉林は無し)の供養だけは欠かさず行なったので、彼岸での閻魔大王の御裁きも罪一等弛むかと下司な下心を期待するのもこれまた悲しき性(さが)で、誠にお恥ずかしき次第である。

さて、前置きが長くなった。人は最期に三途ノ河を渡った後は閻魔大王のお裁きにより、分かれ道を左するか右するかによって冥途へのルートが分かれるが、いずれにしてもこの道は山道であって、目的地は古代インド大陸にあったとされる黄金の山である。この山は観世音菩薩のお住まいがある聖山で、山の名前を「須弥山」(しゅみせん)と言い、標高84,000由旬(126万km)、頂上の直径32,000由旬(48万km)という途方もない大きさの山であるらしい。「須弥山」は現地サンスクリット語“スメール”の音訳である。由旬<ヨージャナ>とは距離の単位で、1由旬とは牛車で1日間歩く距離を指す。約15km。

標高は世界最高峰のエベレストの15万倍、頂上の直径は富士山の50万倍という途方もない大きさであるそうだ。

前世の因縁も悪く、今生でも悪行の限りを尽くした小生は閻魔大王のお裁きの分岐点で、極楽でもある須弥山へのルートが許されるとはとても思えないが、マ、閻魔大王への袖の下のお布施も兼ねて須弥山の下見に行ってきたので、以下にその下見山行?の報告をしたい。



(須弥山曼荼羅図)

皆さんも早かれ遅かれいずれはこの須弥山を目指されることになる訳であるから、頭の片隅にでも記憶しておいて下さればその際は多少の役に立つかも・・・。

さて、須弥山のガイドブックは前頁のような曼荼羅図や右のような絵図が本邦のお寺や歴史博物館にもゴマンと収蔵されているらしいが、いずれも曼荼羅であって、此岸にも彼岸にも山行ルートの研究に役立つようなルート地図などというシロモノは全く無かった。

お布施や渡船賃や現世での修行や懺悔が足りない輩は三途の向こう岸に着く前に此岸に追い返される仕来りとなっているが、小生は閻魔様への袖の下が効いたのか何とか彼岸に上陸することができた。

閻魔大王が座って居る冥界入口の関所の裏庭からは、はるか遠くに須弥山が霞んで見えた。これから何万年掛るのかは定かではないが、この裏山の道をトボトボと歩いて行けばやがては観世音菩薩の居られる須弥山へ辿り着けるものと思われた（但し、前世の因縁が悪かったり、今生で悪行を行った輩には別途ウン万年間の地獄攻めの苦行が待っている）。

ところがである。誠に困ったことに、須弥山の麓の登山口まで辿り着くためには、更に三途ノ河よりも何億倍も広い河を渡らなければならないことが分かった。

この川を二河と言ひ、河の流れは赤い炎が吹き出ている火の河と青い水が渦巻く水の河に分かれていて、この両河の間には小さな一筋の白い道が通じていてこの道を「二河白道」と呼ぶらしい。

いずれにしても白い道を歩いてこの二河を渡り切らねば須弥山への登山口には辿り着けない寸法となっていた。上に二河白道の絵図の一例を示す。左側の流れが炎が吹き出ている火ノ河、右側が水が渦巻く水の河である。



(須弥山。引用出典：東京国立博物館アーカイブ)

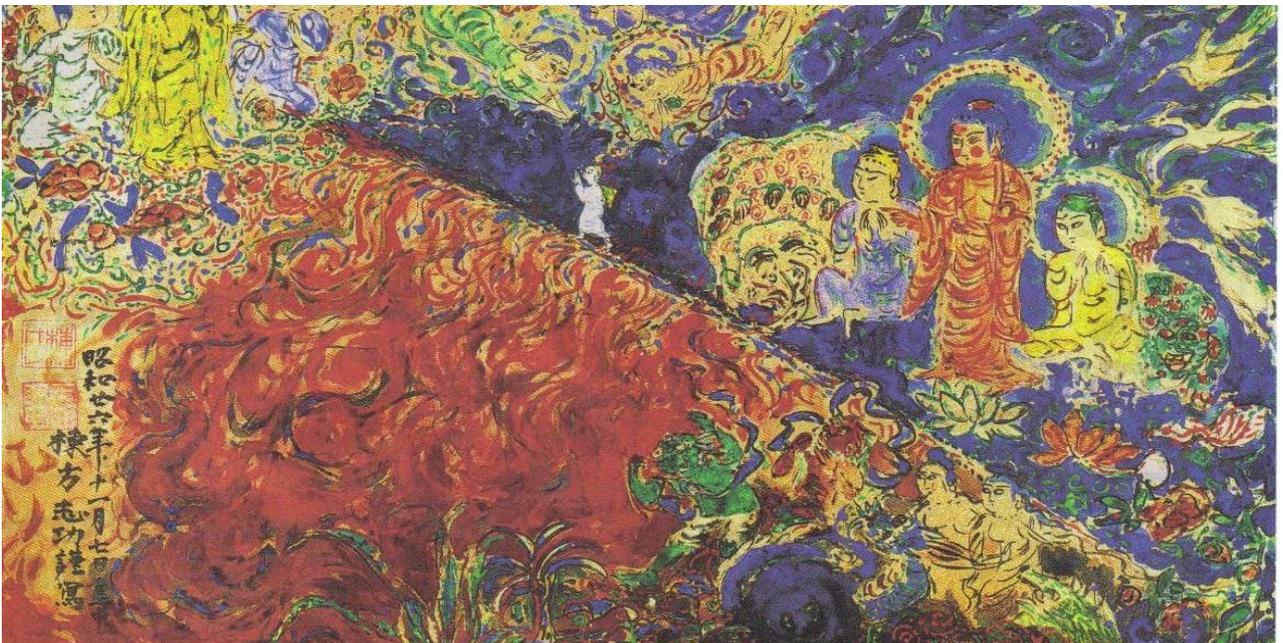


(二河白道図。引用出典：龍谷大学図書館アーカイブ)

「二河白道」の絵図は怒りや憎しみを象徴する火の河と、執着を象徴する水の河に挟まれても、阿弥陀如来を信じる白い一筋の道があれば、極楽浄土に行くことが出来るということを示しているのだそう。

白衣を着て白い道を渡っている亡者に向かって槍や刀で追い撃つ悪党や蛇や狼や虎などの魍魎魍魎が襲い掛かっている。右下には送り出す側の釈迦如来、左上には迎える側の阿弥陀如来がそれぞれ描かれている。

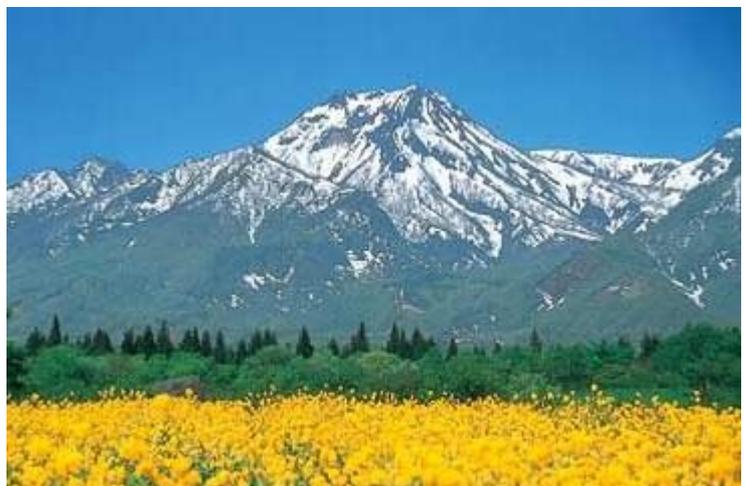
小生も脛に瑕持つ身であるからして、白い道に踏み出した途端に蛇や魍魎魍魎の攻撃に遭って二河の渡河を逃げ帰らなければならない羽目に陥った。原因は異なるが、此岸の山行でもよくやった途中リタイヤと同じである。嗚呼、情けない。ここでリタイヤした亡者は、地獄卒の赤鬼や青鬼に引いて行かれてウン万年の間地獄の針の山や血の池で苦しめられるそうだから、1万年ほど後に再びこの二河白道に戻ってきた時に「須弥山下見山行記 続編」を報告するので、それまで板画家の故棟方志功画伯謹寫の下の二河白道図でも眺めながら暫しお待ち下さい。三界萬靈六道の間。合掌。



(棟方志功画伯謹寫 二河白道図)

追記：上でも触れたように、「須弥山」は現地のサンスクリット語“スメール”の音訳であるが、邦訳は“妙高”である。“妙高”とは、仏教用語で「世界の中心の山」という意味らしい。本邦の妙高山も心眼で見れば恰も須弥山の聖山のように見えるのかも知れない。

(本邦の「須弥山」 妙高山⇒)



大塚 忠彦 (2024年2月5日 記す)